様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　15 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００９～２０１１
課題番号：２１５２０５２４
研究課題名（和文）日本語の配慮表現の研究とその日本語教育への応用

研究課題名（英文）　Research of a Japanese consideration expression and Application to language education

研究代表者
牧原　功（MAKIHARA　TSUTOMU）
群馬大学・国際教育・研究センター・准教授
研究者番号：２０３３２５６２

研究成果の概要（和文）：ここ数年、文のポライトネス・配慮表現に関する研究が活発に行われるようになってきた。そこでは、文末のモダリティに関わる成分や副詞などが主な考察の対象となっているが、本研究では、それ以外にも、副助詞、ボイス、テンス・アスペクト、引用形式などの文法カテゴリーや、意志的なコントロール性も配慮表現として機能していることを明らかにし、より広い視点からの研究が必要であることを示した。また、外国人学習者にとって配慮表現の習得が困難であること実証的に検証し、このような面に留意した日本語教育が必要であることを示した。

研究成果の概要（英文）：Although many Japanese consideration expression researches are made these days, the many are targeting modality expression of the sentence end, and the adverb. It is a clear thing that they are the main elements of consideration expression. However, many grammatical ingredients in connection with consideration expression exist besides it. This research points out that adverbial particles, the voice of verbs, the tense and aspect, the form of quotation, and the will characteristics of the movement are participating in consideration expression. And it was pointed out that the Japanese language education which cared about consideration expression is required.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１１年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：言語学、日本語学、語用論、統語論
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：配慮表現、ポライトネス、語用論、日本語教育、対照研究

１．研究開始当初の背景

語用論研究において、20 世紀終盤から急速に注目を集めているトピックとしてポライトネスがある。ポライトネスとは、会話における当事者同士の互いの面子を保持する等、人間関係の維持を慮って円滑なコミュニケ

ーションを図ろうとする際の社会的言語行動を指す。これについて Leech(1983) Principles of Pragmatics は、自己と他者に及ぶ利益・負担への配慮に関する７項目のポライトネスの原理を立て、Brown & Levinson(1987) Politeness は、ポライトネスについて、相手のフェイス（社会生活を営む上で他者との人間関係に関わる基本的欲求。面子）を脅かさないように配慮して行われる言語行動と定義した。これらは普遍性のある理論と予想されるが、個別言語としては英語において関心を集めるにとどまっていた。

一般に、日本語における対人配慮に関わる敬語以外の言語表現としては、意見を述べる際の文末の言語形式「～のではないだろうか」「～のようだ」のような断定を避ける形式などが想起される。しかし、対人配慮を表す言語表現、本研究で述べるところの配慮表現は更に広い言語現象として存在している。例えば、「ビールでももらおうか」の「でも」や「ビール、3 本くらい持ってきて」の「くらい」なども対人関係の円滑化に役立っていると思われるが、このような「でも」や「くらい」も配慮表現の射程に入る言語表現と言えるだろう。また、「ちょっと」「あいにく」等の副詞類や、対話において前置きとして機能するようなタイプの従属節、「いいにくいんですが」「こんなこと申し上げていいのかどうかわからないのですが」といった表現、さらには話すことを躊躇していることを示すような非言語行動も、配慮表現或いは「配慮行動」として位置づけることが可能である。これまで研究対象として取り上げられることは少なかったが、かかる面から日本語の研究を進める必要性は非常に高いと考えられた。

また、このような多様な形態によって表される配慮表現を日本語学習者はどのように習得するのか、習得しにくいものにはどのようなものがあるのかを検討する必要もある。

上記のような理由から、日本語の配慮表現にはどのようなものがあるのかを考察し、外国語との対照研究を行い、その成果を日本語教育に活かしていくことが必要であると考えた。

２．研究の目的

本研究は以下の４点を目的とした。

（１）日本語の配慮表現の抽出と理論化

日本語における配慮表現の多様性に注目し、その言語現象に該当するものを詳細に調査し、用例とともに収集し、可能な限り理論的説明を与えていく。

（２）配慮表現の対象研究

日本語において見いだされた配慮表現が、他言語においてどの程度普遍的に見いだせるのか、また、見いだせるとしたら、構造の異なるそれらの他言語において、どのような形式を用いるのか、などについて、対照研究の観点から調査を行う。

（３）日本語学習者の配慮表現習得

日本語と他言語とで異なる配慮表現のあり方が、日本語学習者にどのような影響を与えているかを調査する。

（４）日本語教育への応用

日本語及び外国語での配慮表現の研究成果を日本語教育に活用し、外国人学習者に配慮表現をさせるための方法を検討する。

以上の観点から日本語の配慮表現についての考察を進め、その成果を日本語教育に活用することを目指した。

３．研究の方法

（１）データの収集

研究を進めるにあたり、まず、日本語の配慮表現にどのようなものがあるのかを明らかにしていく必要があった。そのため、以下の方法でデータを収集した。まず、テレビのインタビュー場面や、バラエティー番組における会話など、自然な会話データと判断できるものを録画した。また、大学生の日常会話の録音を行い、生データの収集も実施した。これらを基礎資料として利用し、日本語の配慮表現と考えられる表現形式が、実際の会話の中にどのように現れているか、どのように使用されているのかの分析を進めた。

（２）配慮表現の理論的考察

データ収集作業と平行して、語用論、発話行為論との関連から、日本語の配慮表現を理論的にどのように体系化できるのかについて考察を進めた。

（３）対照研究

日本語、中国語、韓国語における配慮表現について、海外の研究協力者と共同で、主に語用論的な観点から分析を進めた。語用論・発話行為論と配慮表現との関連、配慮表現研究の語用論における体系化を山岡が中心となって行った。また、文末のムード形式とポライトネスとの関係、文中の副詞とポライトネスとの関係について牧原が、また、日本語の引用形式と配慮表現との関係、外国語での引用形式の用い方などについて小野が、それぞれ中心となって検討を進めた。

（４）日本語教育への応用

日本語学習者が配慮表現をどのように運用することができているかを考察するため、中国語・韓国母語話者を対象として、意見を述べる、自己推薦状を作成するなどの内容で文章を作成させデータを収集した。それら収集したデータを配慮表現の使用状況という観点から分析し、配慮表現の習得、運用における問題点がどのようなところに存在するか検討した。

４．研究成果

（１）配慮表現の類型化と理論化

資料の分析から、日本語の配慮表現は、いわゆる敬語表現にとどまらず、数多くの文末表現に観察されることがわかった。また、文末表現に限らず、文中の副詞も配慮表現的（聞き手に対する対人配慮を表す用法）に用いられる用例が多数観察された。さらに、文末のムード形式や文中の副詞、あるいは副詞的成分（副詞節も含む）以外にも、ボイス、引用表現、テンス・アスペクトの使い分け、取り立て詞の使用なども配慮表現として用いられていることが明らかとなった。また、本来は他の発話機能を持つ文を転用することによる配慮表現も数多く見られ、例えば介護の現場で用いられる「起きますよ」のような形で用いられる行為要求表現などは外国人学習者にとって習得や使用の難しいものであることがわかった。

配慮表現を実際の言語事象から考察すること、及び理論的な位置づけを行うことは、語用論の側面からの日本語研究を更に押し進めることにつながったと考える。2010 年には、本科研費研究の成果を元に研究代表者及び研究分担者で執筆した『コミュニケーションと配慮表現』（明治書院）が出版された。本書での考察は、今後日本語についての語用論的な本格的な考察を進めるにあたって、広く有効な知見を提示できたと思われる。

（２）対照研究の側面

日本語の配慮表現に関わる様々な言語現象について考察を進める一方で、海外の研究協力者と共に中国語、韓国語での配慮表現の諸相についても検証を行った。日本語と韓国語との対照研究では、特に終助詞の使用においていくつかの顕著な差が見られることがわかった。中国語との対照研究では、中国語では状況指示方の命令・禁止表現が使われにくいこと、日本語と比較して、動作の意志的なコントロール性を自動詞と他動詞の使い分けで表し分けることが少ないことなどが明らかとなった。

（３）日本語学習者の配慮表現の習得と運用

外国人学習者にとっての配慮表現の修得とその使用の困難さについて実証的な検証を進めるため、中国語・韓国母語話者を対象として、意見を述べる、自己推薦状を作成するなどの内容で文章を作成させ、配慮表現という観点からどのような問題が見られるかについて検討した。その結果、作成された文章例から、文のポライトネスという部分でも、母国語における言語使用の在り方が日本語の言語運用に干渉していることが見て取れ、母国語で問題ない表現をそのまま日本語訳することによって、対人配慮という観点から見て問題を含む表現が生産されていることが明らかとなった。

これまでに出版された日本語教材でも度々言及されている事柄、例えば意見を述べる際に断定を避けるといったような部分では比較的良好な習得がなされていたが、複数の学習者が上手く使用できないいくつかの例も見つけることができた。例えば、レポートでこれから検討するテーマを提示する際、日本人であれば「以下では〇〇について検討したい」という表現を用いると思われるが、中国人学習者には「以下では〇〇について検討しよう」という表現が散見された。また、自己推薦状で自己の誇るべき出来事に言及する場合、日本人であれば「優秀な成績を収めることができ、3年生の時には××奨学金を得ることができました」のように可能形を用いる場面で、「優秀な成績を収め、3年生の時には××奨学金を受けました」のような表現をとってしまうことなどである。これらの表現は、これまで配慮表現として機能していると言及されることがなかったものである。そのため、特に注意を払うことなく、母国語で使用する表現形式をそのまま日本語化してしまうことにより、丁寧さの欠ける表現となっていることが見て取れる。

今後の日本語の配慮表現研究の進展と、その成果の日本語教育への応用が強く求められる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

① 牧原功、日本語の配慮表現に関わる文法カテゴリー、群馬大学国際教育・研究センター論集、査読有、第 11 号、2012、1-14

② 牧原功、日本語の配慮表現と取り立て詞、

Liberal Arts、関東学園大学紀要、査読無、19巻、2011、pp.157-165

③ 牧原功・山岡政紀・小野正樹、ポライトネスから見た蓋然性判断に関わるムード形式の意味と機能、跨文化国際中的日語教育研究、査読有、第1巻、2011、533-534

④ 牧原功、配慮表現としての文末のムード形式、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第1号、2011、51-60

⑤ 山岡政紀、「と思う」構文の発話機能に関する対照研究、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第1号、2011、93-102

⑥ 小野正樹、日本語引用表現の分類試案、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第1号、2011、3-10

⑦ 金玉任、確認要求表現「ね」と「だろう」、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第1号、2011、11-19

⑧ 李楠南、禁止表現の日中対照、日本語コミュニケーション研究論集、査読無、第1号、2011、103-112

⑨ 牧原功・山岡政紀・小野正樹・李奇楠・金玉任、日本語の配慮表現研究と日本語教育、2010 世界日本語教育大会論文集、査読無、2010、pp.1-30

〔学会発表〕(計16件)

① 山岡政紀、配慮表現研究の地平、待遇コミュニケーション学会2012年春季大会、2012.4.28、早稲田大学(東京都)

② 李奇楠、「励まし」の日中対照、第2回日本語コミュニケーション研究会、2012.1.22、筑波大学(茨城県)

③ 金玉任、終助詞「よね」について、第2回日本語コミュニケーション研究会、2012.1.22、筑波大学(茨城県)

④ 小野正樹、「って」のコミュニケーション、第2回日本語コミュニケーション研究会、2012.1.22、筑波大学(茨城県)

⑤ 山岡政紀、いわゆる疑問文のコミュニケーション上の二面性をめぐって、第2回日本語コミュニケーション研究会、2012.1.22、筑波大学(茨城県)

⑥ 牧原功、日本語のテンス・アスペクトとポライトネス、第2回日本語コミュニケーション研究会、2012.1.22、筑波大学(茨城県)

⑦ 牧原功、ポライトネス研究から見たモダリティ、第8回筑波大学応用言語学研究会、2011.9.10、筑波大学(茨城県)

⑧ 牧原功・山岡政紀・小野正樹、ポライトネスから見た蓋然性判断に関わるムード形式の意味と機能、2011世界日本語教育研究大会、2011.8.21、天津外国語大学(中国)

⑨ 李奇楠、禁止表現の日中対照、第1回日本語コミュニケーション研究会、2011.2.24、筑波大学(茨城県)

⑩ 金玉任、確認要求表現「ね」と「だろう」、第1回日本語コミュニケーション研究会、2011.2.24、筑波大学(茨城県)

⑪ 小野正樹、日本語引用に関する一考察、第1回日本語コミュニケーション研究会、2011.2.24、筑波大学(茨城県)

⑫ 山岡政紀、「と思う」構文に関する対照研究、第1回日本語コミュニケーション研究会、2011.2.24、筑波大学(茨城県)

⑬ 牧原功、非断定の文末形式とポライトネス、第1回日本語コミュニケーション研究会、2011.2.24、筑波大学(茨城県)

⑭ 山岡政紀・牧原功・小野正樹・李奇楠、「と思う」の発話機能に関する対照研究、Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese、2011.2.5、San Francisco State University (U.S.A.)

⑮ 小野正樹・許允瑄、対話における日韓モダリティ表現の焦点構造、2010年中国人民大学・北京大学・筑波大学日本言語文学フォーラム、2010.11. 6、中国人民大学(中国)

⑯ 牧原功・山岡政紀・小野正樹・李奇楠・金玉任、日本語の配慮表現研究と日本語教育、日本語教育世界大会、2010.8.1、政治大学(台湾)

〔図書〕(計1件)

①山岡政紀・牧原功・小野正樹、コミュニケーションと配慮表現　日本語語用論入門、明治書院、2010、1-256頁、

６．研究組織

(1)研究代表者

牧原　功（MAKIHARA　TSUTOMU）
群馬大学・国際教育・研究センター・准教授
研究者番号：２０３３２５６２

(2)研究分担者

山岡　政紀（YAMAOKA MASAKI）
創価大学・文学部・教授
研究者番号：８０２２０２３４

小野　正樹（ONO　MASAKI）
筑波大学・人文社会学研究科・准教授
研究者番号：１０３０２３４０

小池　康（KOIKE　YASUSHI）
関東学園大学・経済学部・講師
研究者番号：７０３３４０１８

(3)連携研究者

(4)研究協力者

金　玉任
誠信女子大学校（韓国）・文学部・教授

李　奇楠
北京大学（中国）・文学部・副教授